

私たちのからだは、
食べたものでできている。

の生産現場では、手をかけ心をくばっても、時にうまくいかないこともある。そうやって手間かけて育てられた食べものを口にするとき、育てた人が費やした時間であるその人の命をもいただいている。

人は、人とのつながりのなかで生きている。人との関わりによって人生が変わる。生きるとは楽しいことばかりじゃない。悲しいことや苦しいこともある。自分ひとりではどうしようもないこともある。だけど、それは生きているからだ。

改めてこれから生きる子どもたちへ、多くの命や人に支えられて生きていること、そして人との関わりのなかに救いがあるということ伝えたい。いろんな情報が溢れる時代だからこそ、直接人に会い、実際に現場へ足を運んで、自分の手や足、目や舌で感じ、生きる実感を人との関わりの中で見つけてほしい。そんな機会がたくさんあるまちであってほしいと願う。

奈良市役所 谷田 順子

世の中は便利な方向に走り、お金を出せばいつでも好きなものを好きなだけ口にすることができる一方で、食べ物がどうやってできるのかを知らない人が増えた。その結果、人とのつながりも希薄になったように思う。

わたしたちは「いただきます」と「ごちそうさま」という言葉の本当の意味を理解できているだろうか。食べものを食べ「生かされている実感」のある人はどれくらいいるのだろうか。生まれた時から身近に食べものがある子どもたちは、「なぜ生きているのか」「生きるってどういうことなのか」を知らないままに育っていく。

「命」の源である食。わたしたちは日々「命」をいただいて、「命」をつないで生きている、そのことを知る必要がある。

食べものに向き合っていくと、その答えが生産現場にあることにいきつく。畑では種から芽がでて作物が実るまで一連の様子を見ることが出来る。そこには、自然界の「いのち」に真正面から向き合い、食べる人を想って作る人がいる。そのことを知ることが大切だ。自然相手

